



書物を食べる？

大森 正樹

1984年、ブリュッセルからルクセンブルグに向かう電車に乗って、アルデンヌ高原にあるシネーへ向かった。ここにはベネディクト会のシュヴトーニュ修道院がある。東西両教会の一致を願って、ベネディクト会士、ボードワン(†1960)が1939年に設立したところである(最初は別のところで1925年に設立)。ラテン典礼用の聖堂と東方典礼用のそれがあり、後者では日曜日には交代でギリシア典礼とスラヴ典礼が執り行われていた。この時、今はなきメリノール会のH師が滞在しておられ、私も客分として遇され、修道院の中の大きな一室が与えられた。私はT神父より修道院の図書館を自由に入出入りできるよう鍵を渡された。ほんの数日の滞在であったが、当時、日本では見ることのできなかつた、東方キリスト教関係の書物を実際に手で触って、中を眺めることができたのは、大変うれしかったし、わくわくする思いであった。

図書館といえば、ベルギーの後、勉学のために赴いたローマの東方教会研究所(通称、オリエンターレ、イエズス会の経営するローマの三つの大学・研究所の一つ。他は、グレゴリアナ大学と聖書学研究所)でも大きな感銘を受けた。ロシア人学者のボルシャコフは、オリエンターレの図書館は西欧においてロシア正教関係についてはもっとも充実していると言っているが、シュヴトーニュにしても、オリエンターレにしても、東方教会関係の図書が充実していることは眼を見張るばかりである。

ところで、シュヴトーニュ滞在中、日ごとの夕食には院長を先頭に、その後にお客(この時は我々の他にコプト教会の神父がおられた)が続き、直立した修道士が居並ぶ中を、中央の食卓に向かうのであった。なんと面映い感じがしたものである。院長の先唱で、スラヴ語の「主の祈り」を唱えた後、食事をすする。日曜以外おしゃべりは禁じられ、食事の間、一人の修道士が、霊的書物を読み上げ、他の者はそれを聞きながら食事をすする。そのときはフランス語に訳された『フィロカリヤ』(東方の優れた霊的師父の著作の選集、18世紀頃編纂)からの抜粋の朗読であったようだ。この形式は修道院の歴史とともに古いものである。

修道士は読み上げられる先達の霊的師父の言葉を、現在自分が食している食べ物と同じ栄養物として、摂取するのである。このこと自体は絶えず神へ向かう心を涵養するための一種の装置であるが、いわば他者によって発せられた言葉を自分の中に取り入れて、それを反芻し、血液の中に送り込み、体内を十分に経巡らせ、その結果、自分の肉とするのである。まさしく言葉(それは神からの言葉と解されるが)を、言葉からなる書物を、食するのである。言葉は人の血肉となつてはじめて力をもつ。それは人を内側から支えるものとして、人を勇気づけ、生かすのである。

このことは我々に次のことを教えてくれる。何事であれ、人間が為しとげようとすれば、我々の五感を総動員して、絶えずそれに心を用いること、常にそのことを念頭に置いて、片時もそこから逸れないでおくこと、この日々の精進の果てに、目指す光は射し込んでくるということである。言葉、特に霊的な言葉は、この精神状態を保つための最も滋養に富む食物なのだ。

(Masaki OMORI:人文学部教授)



大正・昭和期におけるカトリック逐次刊行物の流れについて

今井和子、今井麻里子、石田昌久、小林志保

<大正期：成長と発展の時代>

日本カトリック界の出版事業は、殊に外国人宣教師による血の滲むような努力と海外からの援助の甲斐あって、明治期に漸く二本足で歩きはじめた。その後、大正期に入るや否や第一次世界大戦が勃発し、教会が受けた痛手も少なくなかったが、その勢いは次第に回復し、関東大震災の苦境をも乗り越え、出版活動が盛んに行われるようになった。この時代は周知の「大正デモクラシー」という言葉に象徴されるように、自由主義思想が広まるとともに、出版文化に花が咲き、キリスト教関係出版事業も目覚ましい発展を遂げている。取り分け新聞や雑誌の発達は著しく、様々な文化の大衆化に果たした貢献度は大きい。この時代に刊行されたキリスト教関係逐次刊行物(カトリック以外の教派を含む)は、『基督教年鑑』¹に拠ると、1916(大正5)年10月の調査で72種、大正7年版(1919年1月刊)で115種、大正15年版(1925年11月刊)で141種、昭和2年版(1926年12月刊)で197種が記録されている。数値がやや信頼性に欠ける嫌いがあるが、当時の雑誌や新聞の出版状況の一端を垣間見ることができる。

具体的に雑誌名を挙げるとすれば、先ず手始めに紹介しなければならないのは、明治期に創刊された『聲』である。同誌は1924(大正13)年、同じく明治時代に刊行された『教の園』を吸収しており、1913(大正13)年の報告では既に毎月2,000部²の発行を誇っている。この盛況ぶりは、1912(明治45)年に教友社を創設し、『聲』を三才社から継承するとともに、主幹として同誌に健筆を揮ったステイシェン師(Steichen, Michael A., 1857-1929)の力にあずかるところが大きい。しかし、師の圧倒的な存在感は却って同誌から進取の精神を奪う結果となったのは皮肉である。こうした背景を不満として1920(大正9)年には関口教会青年会の『ペルソナ』(季刊)、上智大学公教学生会の『生命の樹』(不定期刊)など立て続けに発行が試みられたが、何れも文芸的色調であり短命に終わった。その中、岩下壮一師(1889-1940)が中心となって作ったグループは成長し公教青年会となっていたが、同会は遂に、同じく1920(大正9)年、カトリックの修徳雑誌としての性格が色濃い『聲』とは異なる一般布教用の雑誌『カトリック』(月刊)を創刊する。続いて翌1921(大正10)年には『公教青年會々報』(月刊)を発行したが、これは現『カトリック新聞』の前身であり、当初は文字通り同会メンバーの会報にすぎなかったものの、1923(大正12)年1月に『公教青年時報』(月2回刊)と誌名を変えて一般向に刊行するようになり、同年5月『カトリック・タイムズ』(月2回刊)となる頃には日本カトリック教会の報道機関紙としての地位を占めるに至った。その後発行所が変わり、昭和初期には『日本カトリック新聞』と誌名変遷するが、現在に至るまで国内外のカトリック界についての情報を多くの人々に知らしめる役割を果たしている。

¹ 『基督教年鑑(復刻版)』(日本図書センター, 1994)。現在の中国・台湾や朝鮮半島などで出版されていた逐次刊行物を一部含む。また、当然記載されるべき誌名の記載が無いことや、大正14年版(1925年12月刊)に掲載されているタイトル数が56種と他の年と比べて極端に少ないなど、正確とは言い難い。

² 『パリ外国宣教会年次報告』4(聖母の騎士社,)p.40。『教の園』も同年には2,000部を発行。

また、この頃にはカトリック系の専門出版社も登場するようになり、特に札幌の光明社は 1916(大正 5)年に一般信者向の信心・教養週刊誌『光明』を創刊したばかりでなく、幾多の出版を手がけている。加えてこの時期には教区、修道会、教会、個人等が様々な逐次刊行物を世に送り出しているが、特筆すべきは 1920(大正 9)年に産声を上げた『公教家庭の友』³(月刊)である。同誌は 1910(明治 43)年、『聖若瑟教育院月報』として創刊され、翌 1911(明治 44)年の第 15 号より『公教會月報』と改題された逐次刊行物の後身で、家庭向のカトリック雑誌として功績があった。同様な生い立ちの雑誌を列挙するなら、例えば、元個人誌でその後静岡教会に受け継がれ、県下の公教月報と位置付けられた 1918(大正 7)年創刊の『眞の光』(2 年後に『芥子種』と誌名変更)、神戸の青年会刊で 1926(大正 15)年には前述『光明』の付録となった『カトリック・ニュース』(旬刊)、四国のドミニコ会の手によって 1923(大正 12)年に発行された文芸的布教誌『小羊』(月刊)がある。その他の布教誌では、秋田聖心愛子会による同年創刊の『母性』(発行回数不明)、岡山聖心愛子会による 1925(大正 14)年創刊『幼き友』(月 2 回刊)、同年創刊個人誌『オトゾレ』(月 2 回刊)、翌 1926(大正 15)年創刊の同人誌『日曜子供』(月刊)など枚挙に暇がない。

こうして見てくると、カトリック関係逐次刊行物にとっては、雨後の筍の如く生まれては夭折する、総じて夏の夜空に打ち上げられる花火のような時代であった。しかし、それ故活気に満ちており、以後永く中核的な逐次刊行物として存在するもの、換言すれば次の時代に上手に引き継がれるか、または他を吸収・統合するもの、そうした逐次刊行物の基礎造りはしっかり為された時代と言ってよいであろう。

その一方で、次の大戦に向けて軍靴の足音が忍び寄りつつあり、昭和初期に強化される言論・出版の政府による統制は明治末期から既にその体制が整えられはじめていた。新聞や雑誌の発行を取り締まる目的で 1909 年(明治 42)年に公布された「新聞紙法」の第四十二条には「皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆シ政体ヲ変改シ又八朝憲ヲ紊乱セムトスルノ事項ヲ新聞紙ニ掲載シタルトキハ発行人、編輯人、印刷人ヲ二年以下ノ禁錮及三百円以下ノ罰金ニ処ス」とあり、また第四条、第十一条では内務省などによる検閲が義務づけられている。つまり、昭和期のところで述べる雑誌の統廃合には、カトリック教会内部の財政事情や出版物の重複・競合を避けるといった積極的意図、社会的物資不足などとは別の理由があったということである。国家神道以外の宗教に対する厳しい管理の中で止むに止まれず国家総動員体制に組み込まれたということ、そして、政府の意向に沿う形で無理やり戦争に協力させられる中で、教会当局は致し方なく苦渋の選択を迫られたということは記憶に留めておきたい。

(以上 今井和子、石田昌久)

³ 上智大学編『カトリック大辞典』IV(富山房、1954)の p.80 と p.81 の間には増田良二氏の筆なる“我國に於けるカトリック雑誌その他定期刊行物”(折込み一覧表)が存在する。その『公教家庭の友』の項に“大阪玉造教会會報の後身”とあるが正しくは“公教會月報の後身”か、それとも未だ見ぬ雑誌が存在するのか。また、『聖若瑟教育院月報』の項に創刊年は“明治四十三年四月”とあるが同年三月の誤り。“大正八年十二月(No. 115)を以て終刊”との記述は No. 117 の誤り。正確には『聖若瑟教育院月報』は 1911(明治 44)年 1 月(第 10 号)より『月報』、1911(明治 44)年 6 月(第 15 号)より『公教會月報』と改題、更に 1920(大正 9)年 1 月(No. 118)より『公教家庭の友』と誌名変遷。何れも本学図書館所蔵により確認。

< 昭和初期 : 定期刊行物の刊行強化と布教雑誌の創刊 >

1929(昭和 4)年、新たに組織されたカトリック中央出版委員会では、これまで無計画に行なわれていた出版活動の統制とカトリック系定期刊行物の刊行強化を目的として、カトリック中央出版部を設立した。この結果、東京大司教シャンボン師(Chambon, Jean-Alexis, 1873-1948)の指揮のもと内容を刷新し、カトリック教会の中心的雑誌として中央出版部から発行されることとなったのが教友社発行の『聲』と、公教青年会発行の『カトリック』であった⁴。公教青年会は当時、独力での『カトリック』の刊行継続に不安を感じており、他に『カトリック・タイムス』を刊行していたこともあって、同誌の委譲についてもそれほど抵抗はなかったようである。しかしその『カトリック・タイムス』も、その後シャンボン師の意向によりカトリック中央出版部に委譲され、公教青年会は解散、1931(昭和 6)年には『日本カトリック新聞』と改称した。

教会全体の機関紙として新聞刊行を手がけることとなったカトリック中央出版部ではあったが、当時は地方の教区でもそれぞれに教会報を発行するなど地方との協力体制が確立されておらず、その基盤は貧弱なものであった。そこで 1931(昭和 6)年に開催された全国出版物統制会議では、新聞を中心に、出版物が重複・競合しないよう便宜がはかられることとなった。これには購読者の経済的負担を軽くするだけでなく、購読者の散逸を防ぎ、刊行物を中央出版部に集権化する目的もあった。こうして、大阪天主公会発行の『公教家庭の友』、札幌光明社発行の『光明』などが廃刊となり『日本カトリック新聞』に吸収された。しかし、一方で『長崎カトリック教報』をはじめ『無原罪の聖母の騎士』(長崎カトリック教報社)、『Presse Apostolat』(光明社)など、統制会議の決議にもかかわらず発行を続ける雑誌もあった。独自の道を歩んだ雑誌はこの他にもあり、この問題が必ずしも円満に解決したわけではなかったことを示している。

1934(昭和 9)年、中央出版部内において全国カトリック出版物委員会が開催された。これは教会公認の機関紙ともいえる『日本カトリック新聞』を使ってカトリック・アクションを盛んにすることを協議する機会でもあった。このため協議の内容は徐々に出版の枠を超えて布教全体に関わり始め、出版物委員会はいつしか布教委員会へと性格を変えて行くこととなる。こうして 1938(昭和 13)年には、布教委員会が正式に設立されたのを受け、『Actio Missionaria』(『Presse Apostolat』の後誌。邦文とラテン文による。)が邦人司祭向の修養雑誌『布教』と改称、発行されるようになった。

1936(昭和 11)年、中央出版部内では印刷工場休業事件をきっかけに、『聲』と『カトリック新聞』を除いた全ての刊行物を分散移管することが決定。この結果、中央出版部から離れた『カトリック』は 1939(昭和 14)年、出版元をカトリック研究社、誌名を『カトリック研究』と変更するに至った。

< 戦前～戦中 : 出版物統制から休・廃刊へ >

1940(昭和 15)年には戦時体制もいよいよ深刻化し、国内の出版物統制が強化されていた。中央出版部も印刷用紙の配給制限を受け、『聲』と『日本カトリック新聞』以外、全ての出版物の刊行継続を断念することとなった。こうした動きは当然、他の出版社にも見られ、『聖母の騎士』(1936(昭和 11)年に『無原罪の聖母の騎士』より誌名変更)⁵や他のカトリック雑誌も、同じように廃刊を余儀なくされていたことが分かった。

⁴ 「(一)今回、東京大司教閣下の御直轄の下に、カトリック中央出版委員会が組織されまして、昭和五年度から、従来教友社経営の雑誌「聲」と、公教青年会発行の雑誌「カトリック」とを編輯することになります。(二)両誌の発行所は昭和四年十二月より(中略)カトリック中央出版部(中略)に移されます。(中略)(四)爾後両誌とも教會の機関雑誌として、「聲」は信者の教養を主眼とし、「カトリック」は研究と護教とを目的とします。」(『カトリック』第 9 卷 11 号 1929 年)なお、『聲』647 号 12 月にも同様の謹告あり。また『聲』にはこれに伴う教友社の解散についても告知している。

⁵ 「これまで本誌の表題は「無原罪の聖母の騎士」としておりましたが、この「無原罪」といふ語を全然お分かりにならない方もあることと思ひましてこれからはこの語を省き、単に「聖母の騎士」と改めます。」(『聖母の騎士』第 7 卷第 1(68)号 1936.1)

ている⁶。

1941(昭和 16)年、宗教団体法により日本天主教教団が設立され中央出版部は解散、これに変わって日本天主教出版社が創設され、『聲』と『カトリック新聞』の発行が続けられた。また同年 6 月に一旦終刊した『布教』も、12 月には『布教の泉』として再び刊行されている。

1945(昭和 20)年 2 月、戦況の悪化に伴い人手不足と政府による報道規制、用紙の配給停止によってついに『日本カトリック新聞』、『聲』は共に休刊となる。しかしこの年の 8 月、日本が終戦を迎えると、11 月には天主教教団も解散、これに代わって天主教教区連盟が結成された。12 月には『日本カトリック新聞』に先駆けて『光明』が復刊している。

<戦後～平成：復刊、そして新たな模索時代へ>

1946(昭和 21)年はカトリック雑誌の復刊が相次いだ年である。2 月に『日本カトリック新聞』が『カトリック新聞』と名称を変更して発行を再開し、4 月にはカトリック中央出版社から『聲』が復刊、『聖母の騎士』も翌年から発行の再開を果たした。『カトリック研究』はこの年、誌名を『カトリック思想』と変え、出版元もエンデルレ書店へと移った。1947(昭和 22)年、戦後来日する外国人宣教師のための雑誌として『Missionary Bulletin』が創刊されている。1948(昭和 23)年には『聲』も中央出版社から聲社へと出版社を変更し、発行を続けることとなった⁷。また 1949(昭和 24)年、前年に廃刊した『カトリック思想』が『世紀』と改称し、新たに発刊されている。

戦後の精神的混迷状態にあった日本では、1950(昭和 25)年以降、カトリック信者が大幅に増加したが、やがて高度成長期を迎えるとその増加数は次第に頭打ちとなって行った。『布教』は、英文と邦文の両部門を併せ持つユニークな宣教雑誌として国内外に多くの購読者を得たが、1962(昭和 37)年のカトリック司教協議委員会改組で布教委員会が解散したのを受け、その発行はオリエンズ宗教研究所へと引き継がれることとなった。その後、1985(昭和 60)年には英文と邦文を分離し、『The Japan Missionary Bulletin』および『福音宣教』として新たなスタートをきっている。しかし一方では、1968(昭和 43)年、戦後いち早く復刊した『光明』が終刊。1994(平成 6)年には『世紀』が編集長の死とともに廃刊となった。また、1891(明治 24)年発刊以来、戦時期を除き実に 112 年の長きにわたり刊行を続けてきた『聲』も、2002(平成 14)年末をもって休刊することが決定した⁸。昭和の激動期を様々な方策によって乗り切ってきた雑誌も、新しい時代の波に乗り続けるためには、更なる試みが必要となっている。今後も刊行継続を賭けた模索が続くことになるであろう。

(以上 今井麻里子、小林志保)

⁶ 「今や物資節約の風雲急に且つは教会出版統制の意向に添ふためにも本誌は、こゝに潔く本號限り進んで廃刊することいたしました。」(『聖母の騎士』第 11 巻 11(126)号 1940.11)。

⁷ 「このたび、種々の事情によりまして、当中央出版社は、本「十二月號」を持って本「聲」誌発行の業務を止めることとなりました。」(『聲』no.843 1947.12 p.29)

「本誌は今まで編輯のみ大阪教区にて、発行は東京中央出版社にて取扱つておりましたが、本年からは(中略)夙川教会に設けられました聲社にて綜括運営することとなりました。」(『聲』no.844 1948.1 p.32)

⁸ 「このたび私どもは本誌を、今年十二月号の発行をもって休刊とすることに決定するの止むなきに至りました。(中略)休刊のお知らせをせざるを得なくなりましたことは、私どもまことに痛恨の極みでございます。活字離れの今日、購読者の減少は避けられず、また新規購読者の開拓も今後困難となるばかりと予想されます。(中略)種々打開策を検討いたしましたけれども、財政的にもこれ以上続けることは教区としても避けねばならないと判断いたしました。」(『聲』no.1471 2002.8)

<参考文献>

- 上智大学編『カトリック大辞典』IV (富山房, 1954)
高木一雄『大正・昭和カトリック教会史』2 (聖母の騎士社, 1985)
鈴木高明「カトリック出版界の軌跡」(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第1部 第28号 1991年2月 p.181-219)
松風誠人「カトリック出版回顧録」(『聲』vol.960 1957年12月 p.31-35)
松風誠人「布教委員会のはじまり」(『聲』vol.963 1958年3月 p.42-46)
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』(教文館, 1988)
「カトリック新聞 65年のあゆみ」(『カトリック新聞』1988年6月19日 p.3)
小野泰博ほか編『日本宗教事典』(弘文堂, 1985)

(Kazuko IMAI, Mariko IMAI, Masahisa ISHIDA, Shiho KOBAYASHI: 学術情報センター)

資料寄贈者(前号以降～2003.3)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。ここに名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人]

上條光子氏、五味巖神父

[団体]

カトリック札幌司教館(北海道札幌市中央区)

カトリック文庫委員会新委員紹介

岩間潤子(学術情報センター 整理係)

今まで南山学園で長くお世話になっていながら、カトリックの知識がほとんどありませんでした。委員として勉強する時を与えられた事を感謝するとともに、更に共に学びたいと思います。

今井和子(学術情報センター 閲覧・参考係)

学生時代、キリスト教について学ぶ機会がありましたが(ほんの氷山の一角です)、再びこのような形でキリスト教に触れる事になるとは、思ってもいませんでした。より深く知識を得るため、前向きに取り組みたいと思います。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第18号 2003.4.1 発行

南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員: 今井和子、石田昌久、小林志保

NANZAN
UNIVERSITY

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

ホームページ: <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/dyuna/midashi.htm>

E-mail: library-n@nanzan-u.ac.jp TEL: 052-832-3707 FAX: 052-833-6986 担当者: 笹山

